

文学とアニメーション

佐々木恒平

文学とアニメーション

日本の文学の特徴は、移ろいゆく自然を、移ろいゆくままに表現することであろう。俳句にも和歌にも、そのような特徴がある。そして、その起源は荘子にあると私は思う。

たとえば、荘子の中に、どんな体が曲がってゆく人の話がある。毎日毎日がねじ曲がってゆき、日常生活も難しくなるのだが、本人は全く気にしていない。それを悲しみもせず、つらいとも思わず、苦とも思わない。あるゆるものは、ほんの瞬きをするほどの間であっても、絶え間なく変化し続けている。それが造物主のはたらきであるのだから、不思議に思う必要はないし、悲しむ必要もない。ただ、変化するものの変化するさまを、じつと見つめている。そのような視点が、荘子にはある。

そのように、ものの変化をそのままに捉えるということ、それが日本の芸術の型になっている。現代においてその伝統を受け継いでいるのは、アニメーションであろう。アニメーションはまさに、ものの変化するありさまを、そのままに表現するための手法である。純粋な芸術と言ってもよいと思う。

日本にはそのような芸術の伝統があり、その上にアニメーションの文化が根付いている。しかし、アメリカにはそれがない。アメリカ

のアニメは、どちらかといえば観念的である。そこには、自然を写し取ろうとする意欲がない。

たとえば、CGアニメーションという手法は、非常にアメリカ的である。まず、3Dのモデルをコンピュータ上で作って、そのあとで、そのモデルに動きを与える。つまり、先に静止画を描き、そのあとで、それに動きを与えるのである。

しかし、おそらく、手描きのアニメーションは順番が逆である。私はアニメーションを作らないので、これは想像でしかないのだが、まず動きがあり、そのあとで静止画ができるのではないか。つまり、動きに合わせて、絵ができるのではないだろうか。そのようにすると、自然を写し取ることができる。自然とは、静止するものではなく、動くものである。動きから捉えないと、自然を捕まえることはできない。

日本にCGアニメーション制作が根付かないのは、そのあたりに原因があるのではないか。日本のアニメ文化を3D化するには、まず、それを製作するソフトウェアを新しく作らないといけないだろう。動きを先に描き、静止画を後から描けるような、CGアニメの制作ソフトである。

そんなものはできつこないかもしれないが、CGアニメーションを芸術に昇華するためには、そういうものが必要だと思う。そのためには、ソフトウェアの設計思想から見直すべきであろう。

イヨマンテ

先日、『ゴールデンカムイ』という漫画を読んだ。その中に、イヨマンテの話が出てきた。イヨマンテは、アイヌの風習である。簡単に言えば、母親を殺された子熊を村で育て、成長してから殺す、というものである。この風習にどういう意味があるのか、少し気になり、考えてみた。

まず、子熊の親を殺したのは、アイヌ自身である。大人の熊を狩ったところ、その熊には子供がいた。目の前で親を殺された子供までも殺すというのは忍びないし、親がいなくなった子熊は、放っておけば餓死するだろう。そうすると、当面の間は面倒を見ようということになる。それで、村で子熊を育てることになる。

しかし、大きくなった熊が、人間と一緒に暮らすことはできない。かといって、山に返すこともできない。というのは、人間に育てられた熊には、山で暮らす方法が分からないからである。それに、山に捨ててこようとしても、人間の後をつけて、村に戻ってきてしまうかもしれない。そうなったら、どんな間違いが起きるか分からない。

だから、殺すしかないのである。それは一種の妥協であり、折衷案である。それにはやはり罪悪感が伴うので、祭りということにして紛らわす。しかし、その祭りが何のためのものなのか、みんな分かっていたはずである。

祭りや儀礼というのは、自然な感情の発露である。押さえきれない感情が、形となって現れたものである。葬式というのもこれと同じで、親族を失った情が自然に現れたものである。儀礼を軽んじることは、人間性の喪失につながるだろう。

カッコウ

カッコウには、托卵という習性がある。自分とは別の種類の鳥の巣に卵を産み、その巣の親鳥に、代わりに雛を育ててもらうのである。カッコウに托卵された親鳥は、一体どんな気分だろうか。

あれを、親鳥はだまされているんだ、と言う人がいるが、それは違うと思う。たぶん、親鳥は気付いている。気付いているけれども、目の前の雛を見殺しにするわけにはいかないのだろう。

卵のうちに気付いたなら、それを壊せばよい。しかし、雛がかえった後には、もう手遅れである。カッコウの雛は、自分がかえると、まず周りの卵を捨ててしまう。巣の中にはカッコウの雛しかいなくなってしまうのである。

つまり、たとえそれがカッコウの雛だということに気付いたとしても、親鳥は、それからどうすればいいのだろうか。その雛を見殺しにしたあと、いつもなら子供を育てる季節を、何もしないでぶらぶらしていればよいのだろうか。そんなことに何の意味があるだろうか。

状況は全然違うが、この例はイヨマンテと似ていると思う。自然界に普遍的に見られる、博愛主義の一例ではないだろうか。

あるいはこれを、資源の有効活用と考える人もいるかもしれない。自然界に存在する資源を、最大限有効に活用しようとするメカニズムだ、と。しかし、それは一体何のためなのか。自然界に無駄がないことが、どうして必要なのか。

たぶん惻隱の情というのは、自然の摂理である。それは、それ以上説明することのできないものではなからうか。

『なめとこ山の熊』について

宮沢賢治に、有名な『なめとこ山の熊』という童話がある。ぜひ読んでみてもらいたい。すでに色々な解釈が与えられているが、思うに、そのモチーフは捨身飼虎であろう。物語の最後で小十郎は如来となり、熊たちはその弟子として悟りを開いたのだろう。

ときどき、この童話に熊と人間の対称性を読み取ろうとする人がいる。だが、それは正しい解釈ではない。宮沢賢治の童話を、仏教から切り離して理解することはできない。

趙州和尚は、犬に仏性はないと言った。私の解釈では、それは、犬には言葉がないからである。犬は人間の言葉が分からないので、仏の教えを聞くことができない。だから、仏性がないと言われるのである。

これは虎も同じである。虎には言葉がない。だから、虎に教えを授けるときは、自らの身をもつてするしかない。それが捨身飼虎のモチーフであり、『なめとこ山の熊』はそれを踏襲していると思われる。

熊の言葉は、小十郎にしか分からない。それは、逆に考えれば、小十郎の言葉ならば、熊にも通じるということである。そのような小十郎の知恵は、慈悲の心によって生まれたものである。小十郎の姿は、慈悲と知恵によって衆生を導く菩薩そのものである。それゆえに、小十郎と熊の関係はどこまでも非対称なのである。

しかし、こういった解説は、あまりにも無粋かもしれない。趙州無字は自分でぶつかって見たほうがいいし、文学作品はひとりで味わえばよいのだから。

仏教と自殺

1

仏教では自殺は禁止されていないのか、という疑問がときどき提出される。これについて考えてみたい。

そもそも、仏教で何かが禁止されているという場合、それはタブーを意味するわけではない。それぞれの人間が自分の判断でそれをやるべきだ、あるいは、やめたほうがよい、と言っているだけである。

キリスト教においては、神がそれを禁止する、ということがありうる。神には人の行いを罰する力があるからである。しかし仏教では、そのような虚構の存在を認めない。だから、仏教における戒とは、ある意味では推奨であり、ある意味では道理を説くものである。

自殺は、愚かさや怒りを原因とする。自殺そのものが悪いことなのではなく、自分は自殺しなければならぬ、という考えを抱かせる原因が煩惱であり、それを滅ぼすことが仏教の目的である。自殺が戒められているということは、そういうことである。

したがって、捨身飼虎のように、他者の煩惱を滅するため自らの命を投げ出すという行為は、必ずしも間違いとは言えない。それはむしろ、自殺の対極にある行いである。ときどき人は、見かけが同じものを、中身まで同一であると勘違いしてしまう。しかし、ダイヤモンドと水晶を取り違えてはいけない。

仏陀には、人を罰する力はない。ただ、人を憐れむだけである。自殺する人を罰するのではなく、ただ、その愚かさを憐れんでいらっしやる。

2

我々は、ある行為が善か悪か、ということを考えるだけでは不十分である。それよりも、何がその行為の原因となっているのか、そして、その行為の結果として何が生じるのか、ということ考察するほうが重要である。なぜなら、その行為が悪い結果をもたらすならば、それをやめねばならない。しかし、それをやめるためには、その原因を知る必要があるからである。その行為が善か悪かということが分かったところで、どうやってそれをやめればよいのか、ということが分からなければ意味がない。ゆえに、善悪の判断よりも、原因と結果の考察の方が重要である。

命は尊い、ということが分かったからといって、それを救う術が分からなければ意味はない。何がよいことであるかが分かったら、それを実現するための手段を探さなければならない。そのためには、原因と結果の関係を知る必要がある。

ある原因からは、ある結果が生じる。別の原因からは、別の結果が生じる。したがって、自分が望む結果を生じさせるためには、その結果を生じさせる原因を作らなければならない。誤った原因を作ってしまったら、誤った結果が生じる。正しい原因を作れば、正しい結果が生じる。原因と結果の正しい関係を知らないことが無知であり、それを知っていることが知恵である。何が善であり、何が悪であるかを知っていることは知恵ではない。それは無知に等しい。

キリスト教徒にとっては、因果律は意味を持たない。神の意志や人間の自由意志は、因果律にとらわれたいとされているからである。しかし、そんなものは実在しない。実在しないものを原因として幸福が実現されると考えているのだから、それが誤りであることは明らかである。何の苦勞もせずに、自分が望んだとおりのものが実現されると

いうことはありえない。たとえそれが、あなたの心の中で起きることだとしても、ありえないのである。

ある心理現象が生じるためには、そのための原因を必要とする。その原因がなければ、その心理現象があなたの心の中に生じることはない。人間は、自分の心の中で起きることを、自由に決められるわけではない。ある心の状態を実現するためには、適切な原因を用意しなければならない。怒りのない状態、愚かさのない状態、苦痛のない状態、それぞれの状態には、それぞれの原因がある。仏の知恵とは、こういった問題に関するものである。

あらゆる苦痛と不幸の原因は無知である。それが仏陀の考察である。

3

たとえば、自分の子供のために命を投げ出す親は、間違ったことをしていると言えるだろうか。それが間違っているのなら、見ず知らずの人間のために自分の命を投げ出すことを、どうして間違いだと言えるのか。それが悪いことだと言えるなら、それは一体どんな根拠によってなのか。

自殺が悪いことだと言われるのはどうしてなのか。命を損なうことが無条件に悪いことだから、自分の命を損なうことも悪いことだと言えるのか。だとすれば、自分の命を投げ出すことで、他者の命を救える場合、そして、自分の命を投げ出さなければ、その人の命が失われてしまう場合、そういう場合に、自分の命を投げ出すことと、投げ出さないことと、どちらがよいことであり、どちらが悪いことなのか。自殺が悪いことであると言える根拠はどこにあるのか。自殺が悪だという考えは、ただのエゴイズムではないのか。自己犠牲を厭う気持ちの後押しする免罪符なのではないか。だから、自殺がよいことだ、と

は言えない。しかし、悪いことだとも言えない。ただ、分かりもしないことに簡単に判断を下すのはよくないのではないか、と思う。

自殺が悪いことである場合があるからと言って、無条件に、全ての場合に自殺が悪いことであると言えるわけではない。自殺がよいことである場合も、可能性としてはありうるのではないか。少なくとも、あらゆる場合に自殺が悪であるということを証明することができないならば、その可能性を認めてもよいのではないか。

これがおそらく、東洋的な道徳の問題である。悪を断罪するのではなく、何がよいことでありうるか、善はどこまで発展しうるか、ということを追求することである。